

Economic Analysis of Daily Recreational Activities and Subjective Well-being

アラム, マスルル

<https://doi.org/10.15017/1789429>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（経済学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	Masrul Alam (マスルル アラム)		
論文名	Economic Analysis of Daily Recreational Activities and Subjective Well-being (余暇活動と主観的厚生に関する経済分析)		
論文調査委員	主査	九州大学	准教授 浦川 邦夫
	副査	九州大学	教授 三浦 功
	副査	九州大学	准教授 宮澤 健介

論文審査の結果の要旨

本論文は、スポーツ参加や読書などの余暇活動が、人々の主観的厚生（主観的健康感）に及ぼす影響について、主に日本、アメリカ、フランスの3か国で収集された個票データを用いた実証分析を行うものである。

余暇活動については、月に複数回の継続的なスポーツ活動（高齢者においてはウォーキングなどの習慣）などが、健康の改善、各種疾患の罹患率の低下につながることで、近年の先行研究で報告されている。また、経済学分野の研究では、スポーツ活動が本人の労働市場での成果や健康に与える影響を分析する事例が蓄積されてきている。日本においても、医療給付費が年間約40兆円に達し、国民の健康の向上による給付費の抑制が重要な政策課題として位置付けられている。これらの実情を踏まえ、スポーツをはじめとする様々な余暇活動の健康への影響、ならびに余暇活動の社会経済的要因について国際比較を踏まえて検証している点に本論文の大きな特徴と学術的な貢献がある。論文は六章で構成され、一章では余暇活動の厚生に与える影響を扱った理論・実証研究のサーベイが行われている。

論文の二章、三章では、日米仏の3か国の余暇活動を調べた個票データに基づき、余暇活動を複数のタイプに分類した上で、それらの活動の実施状況が主観的な健康や所得満足度に与える効果について計量分析を行っている。主な結果として、継続的なスポーツ活動の実施は、3か国のほぼ全てにおいて男女ともに主観的健康に正の効果が見られる点を指摘している。

論文の四章では、同じく日米仏の3か国の個票データをもとに、継続的なスポーツ活動を決定する社会経済的要因について検討を行っている。主な結果として、他の重要変数を制御した上で、大卒以上の高学歴が3か国全てでスポーツ参加に正の効果を持つことから、健康知識や医療情報の共有の重要性が指摘されている。また、所得変数は日本のみ正の効果が見られる点を報告している。

論文の五章では、日本のデータに焦点を絞り、所得の貧困や時間の貧困（生活時間の欠乏）を世帯ごとに定義・測定した上で、これら貧困状態が余暇活動や基礎的活動（睡眠など）に与える影響を検証している。結果として、貧困に陥っている世帯では、スポーツ等の余暇活動が、女性の場合に特に制限される点を示している。

論文調査委員による調査の結果、本論文は個票データを用いた計量分析に基づき、日本の公共政策の方向性に対して一定の政策的含意を導いている点が確認された。以上の点を踏まえ、本論文調査会は、Masrul Alam氏から提出された論文「Economic Analysis of Daily Recreational Activities and Subjective Well-being」を博士（経済学）の学位を授与するに値するものと認める。